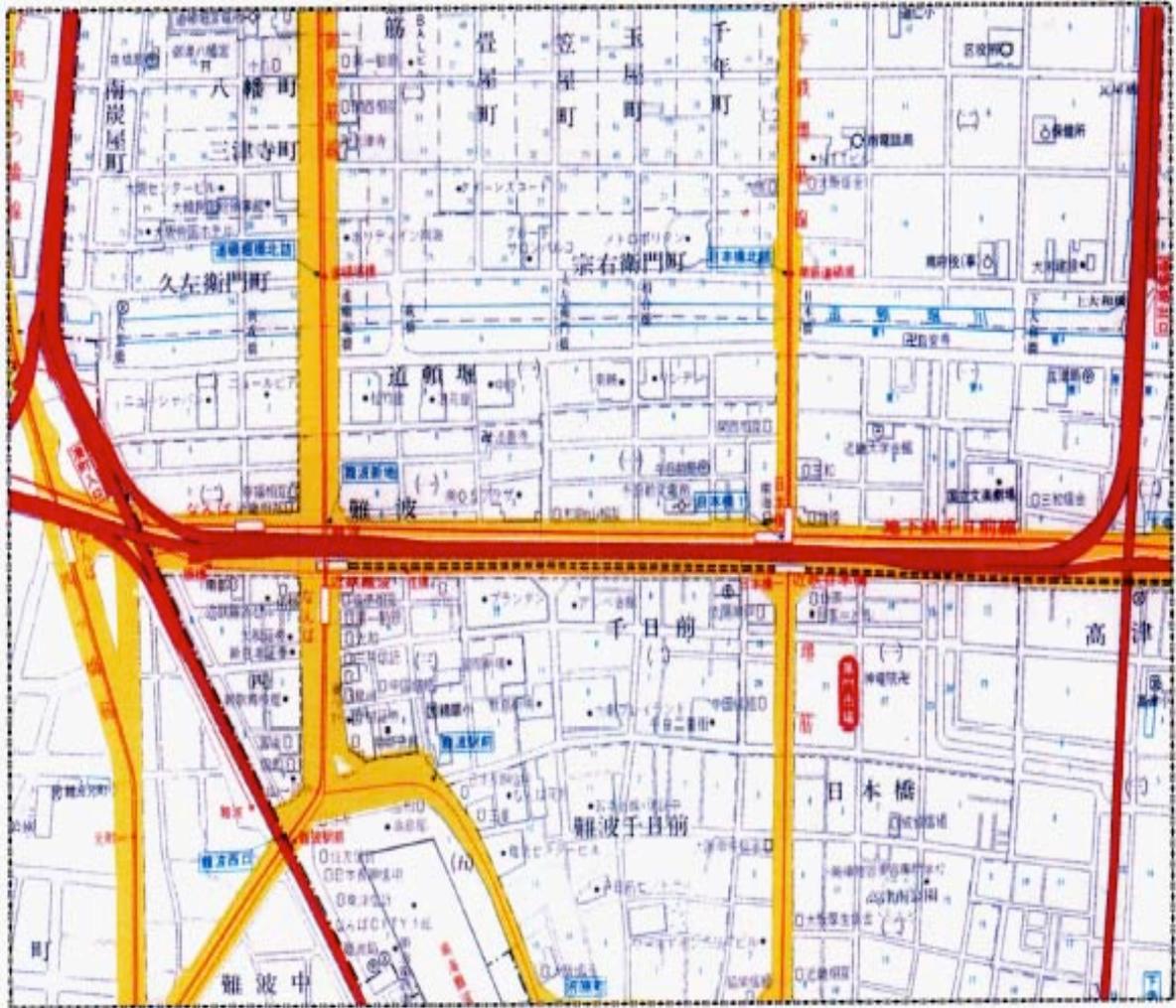


古書店『天牛』について

—「わが青春のふるさと（小谷恒之氏）」追記—

福井 崇 時



小谷さんの寄稿文に大阪の「古書籍店、天牛」と言う書店が出て来ます。この天牛書店は大正から戦後三十有余年の間、知る人ぞ知る大阪での有名古書店で、織田作之助の「夫婦善哉」に「二つ井戸の天牛書店」と実名で登場しますので、皆様には是非紹介をさせてもらうべく、常安さんに頼んで、小谷さんの文に「追記」として書かせて頂きました。

NHK ラジオ第一で午前6時15分から15分間を3回の「人生読本」という番組に昭和56年2月19日から出演し「古本と共に七十年」と題して店主の天牛新一郎さん（この時88才）が話をしています。

この店は私が通った精華小学校（大阪難波の南海高島屋百貨店から心齋橋筋——大阪人は道頓堀の戎橋までを戎橋筋と言っています——を20メートル程行くと道幅が広がる。そこの右側、店舗の横奥に正門があります、現在は児童数が減り廃校となりました）の校区にあり、道頓堀に架かっている日本橋の南詰めを東に入った右側2軒目に間口6間、奥行き23間の大きな店でした。（橋の南詰め西側には安井道頓の記念碑が建っています。）孫娘のトシ子さんが私達と小学校の同期ということもあって、5、6年生の時、放課後、店の前を通ると新一郎お祖父さんが我々を呼び止め店に引き入れて「本をせえだいで読んで勉強しなはれや」と参考書や読み物の本を貰いました。毎日、店の前を通る優等生の高松安太郎君は殆どの参考書は貰ったと言っていました。小学生の時はこの程度の印象でした。実際の新一郎さんは関西在住の作家や文系大学人にとって無くてはならぬ存在で、彼等は天牛書店で本を漁り、購入し読み終えたら売っていた。そして二階の一室に集まっては時間を過ごし、「天牛大学」と言われるような親密な連帯ができた。常連は、織田作之助、藤沢桓夫、折口信夫（釈迦空）、山田信吉、長谷川幸延

（劇作家）、広瀬捨吉らの作家達、室町次郎（後の大河内伝次郎）、花柳章太郎らの役者、そして関西大学などの教授諸氏だった。大阪市民栄誉章、産業功労章を授与された新一郎さんを祝うため北の料亭（梅田曾根崎新地）で「天牛大学同窓会」なるものを開くべく百五十人に呼び掛けたら、百三十六人が集まったそうである。

新一郎さんは明治25年11月25日、和歌山県伊都郡現在の「かつらぎ町」の東湊田で生れた。父が大阪に出て呉服の行商をしていたのを手伝っていた。高津の小学校（4年間の義務教育）では一年上に直木三十五、一年下に宇野浩二がいた。高等小学部で更に4年の課程を終え15歳で卒業した。（この時代は商家の児童は小学校を卒業すると丁稚奉公に出され、高等部への進学はかなり特殊だった。少数の者が中学校へ進んだ。直木は市岡中学へ、宇野は天王寺中学へ進学している。）呉服の行商は自分に合わない、兼ねてから古本屋をしたく思っていた。廃品回収業者から雑誌などを買い綺麗に整えて空家の軒先で売っていた。夫婦善哉に「二つ井戸の天牛書店」と書かれているのがこの時のことである。（二つ井戸とは現在の国立文楽劇場北の辺りの通りの名称で今はこの町名は使われていない。）ある人が夜店で売の方が繁盛すると勧めた。大正の初め頃からの時代は大阪の街では、一日、二日、三日……はどこそこの通りと、決まった道筋で雨が降らない限り毎夜、アセチレン灯火で照らした夜店が開かれていた。そこへ店を開かせてもらった。よく働いたこともあり商売は順調になり夜店でなく小さな店を持つ程になった。店を大きくしたく思っている時、たまたま初めに書いた日本橋南詰の東に月三百円の貸家があった。そこで店を始めたが二階が全く空いているので、色々な貸し席として使わせ家賃の埋め合わせとした。東京では岩波茂雄さんが古本に正札をつけて販売しているこ

とを聞いていたので新一郎さんも正札をつけて販売を始めた。色々苦情を言われたが、やがて天牛の付けた値段は本の値打を正しく示すものと言う評判となった。しかもこの値段は他の店より少し安い。長谷川幸延などは天牛で数冊買い他の店で売って、二、三十銭を作ってはコーヒー代にした。

先に書いたように、二階は今日で言うカルチャー教室のような貸し席とし、また文人達の溜まり場ともなっていた。長谷川幸延は新一郎さんを「おじぎの天牛さん」と称していたように腰が低い謙虚な人であった。河内長野の自宅から南海電車高野線の朝4時半の一番電車で通い一日も休んだことがなかった。勿論正月元旦も休まなかった。

昭和十五年に織田作之助が「夫婦善哉」を同人文芸雑誌「海風」に掲載し二つ井戸の天牛書店と書いていることを新一郎さんが教えられ織田さんとは誰だろうと思っていたとき、数人連れ達って毎日のように店に来て本を買ったり売ったりする長髪の青年が本を売りに来た。

新一郎さんは「規則ですからお名前とお所をお書き願います」と青年に頼んだ。その青年が織田作之助だったことを知り親しくなる。

戦争が激しくなった頃は十六人いた店員は兵隊にとられ、口入れ屋から臨時の女子店員を雇った。疎開をするように勧められていたが、3月13日深夜の空襲で全てを失った。

南海電車高野線の北野田の大美野に家と畑を持っていたが百姓をする気は全くなかった。織田作之助の家も北野田の駅の近くにあった。早く店を再開したいと大阪が復興するのを待ちかねて次女夫婦に道頓堀の中座の向いに店を持たせた。

孫娘は周防町（通称アメリカ村）の西端に店を持ったが、それぞれの商売方針が年期の入った自分に合わないのでも自らは四ツ橋に店を持った。これらの店舗は市街地整備計画のため移転を余儀無くされた。その後の詳細は承知していないが、吹田市江坂町にある大きな店舗が現在の天牛書店である。



写真 1

四天王寺の南隅から西へ坂を下ると、左に一心寺があり更に下ると写真に示す道標が歩道の車道側に立っている。松屋町筋（本文の地図は右端が切れているが、その端より少し右に南北に走っている道）を北へ行くと右側は寺が次々と建っている下寺町。途中で右に坂を上がると「愛染かつら」の愛染堂がある。（一心寺 秀吉時代より古い寺で本来の檀家の他、水子、訳ありで本来の寺に納骨できない骨、行き倒れ等身寄りが判らぬ人達の骨を持ち込んだ。寺ではそれら骨の量が適当になると仏像を作り祀った。戦前はそれらの骨を置く大きな受け皿状の台が本堂の前の野外に置いてあったが、戦後は納骨に費用がかかるようになった。）

今宮には「十日戎」「今宮戎神社」があり、1月10日は大勢の参詣者で埋まる。私達の時代、この日は小学校が休みになった。



写真 2

松屋町筋を千日前通を越えて北へ行くと、本文の地図で東横堀の上の高速道路、赤い道、に「道頓堀出口」があり、道一つ南が道頓堀南側の道で、高速道路の下に写真のように町名を記した札が付いた囲いがある。「二つ井戸」が旧町名だと書いてある。ここを西に行くと堺筋の日本橋。橋を北に渡ると東北隅にちょっとした広場があり、そこに安井道頓頭彰碑が立っている。道頓堀町を更に西へ行くと戎橋に至る。道頓堀は西へ流れ西横堀（埋め立てらか、暗渠になっている）に合流、今は木津川に合流している。